

一瞬強まった風が、秋の気配をいっそう深めたようだった。街路樹の葉がざわっと揺れて、まだ落ちたくない慌ててしがみつきなおしているようだ。もうじきこの町で、たった一つのコンビニがある辻が見えてくる。そこから自宅へと続く坂道は、結構きつい登りになる。藤木俊介は、押している車椅子の取っ手から手を離して、ゆっくり指を揉んでから、もう一度取っ手を掴み直した。

その坂を妻の妙子に乗せた車椅子を押して登ることは、かなりの体力を必要とした。六十九歳になった藤木は、いつもその坂の前で一度呼吸を整えるのだった。だが、その重さと辛さが、妙子が生きているということを、改めて藤木の身体に具体的に教えてくれる。いつもその坂を上るとき、不思議な充実感が藤木を包んだ。

「さあ、もうじき着くぞ。寒くなかったか」

藤木はいつものように妻の妙子に声を掛けてから、また車椅子を押し始めた。妙子はううと声をあげて、身体を揺すった。漢方薬とマッサージの効果が徐々に現れてきていると思いたかった。しがみつききれなかった、にせアカシアの葉が優しく妙子の肩に落ちた。

藤木はぼんやりとその葉を眺めていた。しばらくしてから、来年も

落ち葉が妻の肩にとまる風景を見たいと、激しく思った。

家に着いた。四年前に東京の自宅を売って、この小さな町の中古住宅を買った。藤木は六十歳で大手の出版社を定年退職した。会社の恩顧でそのあと五年間、子会社で働いた。仕事一筋だった藤木の功績を会社は多少は評価してくれたのだろうが、その分退職したときには疲れきっていた。それでも老後の生活資金を少しでも潤沢にしたくて、身体に鞭打って五年働いた。

もう対人関係で疲れるのはうんざりだった。人の少ない綺麗な田舎で、好きだった釣りや、山歩きをゆっくりと楽しみたい。そんな老後を見ていた。そのために頑張ったのだという、自負もあった。

妙子を車椅子のまま、居間まで運ぶ。去年介護認定がおりて、その金と自費で一階をバリアフリーにした。妙子を抱きかかえて、車椅子から居間のソファアに移す。その作業にもすっかり慣れた。妙子も上手に身体力を抜く。二年前とは雲泥の差だ。最初の頃はよく一緒にソファアに倒れこんだものだった。

今の妙子はすっかり痩せてしまったが、倒れた当時はかなりふつくらとした体型だった。その妙子をベッドやテーブルから、車椅子に乗せる作業をどれほど続けただろう。最初の頃は腰が悲鳴を上げるほど痛んだが、コツを掴んでからは、それほど苦痛とは感じなくなつた。無理な姿勢で、無理な力を入れていたのが、今になってよく分かる。習うよりは慣れるか。

「おなかですいただろう。すぐにお昼にするよ。ニュースでも見ようか」

妙子の意識がどうあろうが、藤木は妙子が倒れる前と同じように妙子に話しかける。も

しも藤木の努力が実って、奇跡的に妙子の意識が戻ったとしたら、思い出してほしいから。テレビをつけて、クッションを妙子の背中に当ててから台所に向かう。今日のお昼は何にしよう。昨日はカレーうどんにした。妙子の好物の一つだった。人は悲しい生き物だ。生きている以上、食べなければ死ぬのだ。意識もないのに食べ物を運ぶと口をあける妙子を見るのは最初は辛かった。今は愛しい。出来のいい料理のときには、声を出して身体をゆすって喜んでるように思える。

今日はチャーハンにしよう。ネギとチャーシューを刻む。このチャーシューも藤木の手作りのものだ。包丁もすっきり手に馴染んでいる。欲しかった高価な釣竿がこの包丁に化けた。小さなボールに卵を二個割ってから、中華なべを火に掛けた。別のボールにご飯を二人分取り分けておく。

妙子の様子をみる。オープンキッチンで居間とつながっている。背中しか見えないが顔の角度から、妙子はテレビではなく、外の景色をみているようだ。南に面してほぼ一面がガラスサッシになっている。その先がウッドデッキになっていて、テーブルや椅子を置けるスペースがある。

居間から見えるこの風景も、この家を買った理由の一つだった。ほんのすぐ先を川が流れている。川面は雑草のため見えないが、サッシを開けるとかすかにせせらぎが聞こえる。視線を上げていくと、川から続いている山々の稜線が眼に入ってくる。稜線は幾重にも重なり、遠近による濃淡が美しい。妙子もこの景色が気に入っていた。特に雨の後や気温の差の激しい明け方に、川から上がった霧が山を登っていく。うっとりしながらそれを見ている妙子を、うっとりしながら藤木が見ていたものだ。

中華なべから煙があがる。色々試したがチャーハンはシンプルが一番だ。油をたっぷり入れて鍋全体に馴染ませてから、余分な油を切る。卵を入れて数秒でご飯を入れる。全て強火のままだ。料理をするようになってから、強い火力のガステーブルに変えた。中華なべをあおる。卵がご飯を一粒づつ包んで、いかにパラパラになるかが勝負だ。塩、コショウ、ネギとチャーシューを加えてひたすら鍋をあおる。いつまでこの重い鍋をあおる体力を保てるだろう。最後に自分で調味した醤油を、鍋肌から回し入れてひと炒めした。冷蔵庫からストックしておいただし汁で、簡単な和風スープを作った。

醤油の焦げる香ばしい匂いが居間に立ち込めた。匂いに気づいて、妙子がこちらを向いてくれるのを期待して背中を見つめていたが、その気配はなかった。食器を取り出して、チャーハンを盛り付けた。中華料理用のお玉にご飯を押し込め、丸くこんもりと綺麗に盛り付けることが出来た。自分の手際よさに、自分で笑った。人は悲しい生き物だ。立場を変えてみて初めて気づくことが多い。何十年も妙子是自己のために料理を作っていたのだ。感謝の言葉を一度でも掛けたことがあったろうか。料理だけではない。洗濯、掃除、買い物、妙子の介護を始めてから、藤木は主婦の労働量の多さを改めて知った。

ソファの前に低めのテーブルをセットして、チャーハンとスープを運んだ。妙子の隣に座る。藤木も山を眺めてみる。名所というわけでもないが、この山々も紅葉はする。僅かに色づきかけた気配がある。季節ごとに変化して行く山々は、何年見続けても飽くことはない。妙子もこの山々の控えめな紅葉が好きだといっていた。

「さあ、食べよう」

テレビを消して妙子をテーブルに向かう姿勢に整えた。スプーンでチャーハンを食べさ

せる。今日のチャーハンはいい出来のほうだ。思ったとおり一口食べてから、妙子は身体を揺すって「う、う」とくぐもった声を上げた。顔が歪んでいる。藤木にはそれが笑顔を作ろうとしているからだと分かる。最初の頃は無表情で、口だけが動いていた。歪んだ顔を見るために料理の腕を上げた。静かな居間にスプーンと食器がぶつかる音と、くぐもった声だけが響いていた。

二

妙子が倒れたのはその年の最低温度を記録した、去年の二月の半ばだった。藤木が新しいウオーキングシューズを買いに出ていて、ついでに妙子のシューズも買って戻ったら、キッチンで倒れていた。脳出血だった。朝は何も変った様子ではなかった。妙子は最近パン作りに凝っていて、やつと納得するパンが焼けたと、初めて食卓に出してくれたのだった。

藤木は最初、妙子がキッチンで転寝をしているのかと思った。妙子の身体が壊れることなど、考えたこともなかった。人は悲しい生き物だ。他人の健康など自分の都合を全て考えてからではないと、思いつけない。

「何をしてるんだ、風邪を引くじゃないか。お前はまだ履けると言っていたが、新しいシューズを買ってきたぞ」

のん気に声をかけて起こそうとしたが、心配がおかしかった。釣りや、この土地に来てやつと飼えた雑種の犬の、長い散歩から帰ったときに、稀にソファーで転寝をしている妙子を見ていたが、目の前に倒れている妙子はそんな雰囲気ではなかった。殆んど顔面が床に突っ伏している。死、という言葉が脳裏に浮かんだ。叫び声を上げそうになったのを堪えた。誰か、誰かと呟いていた。妙子の横に跪いた。低く名前を呼んで、もう一度妙子をよく見た。

髪の毛で表情は分からなかったが、腹部が静かに上下している。呼吸をしているのだ。安堵で大きく息を吐いた。もう一度声をかけたが、妙子は動かなかった。電話で救急車を呼んだ。脳出血などの場合はむやみに身体を動かさないほうがいいと、何かで読んだ気がしたので、そうつと頭の下にタオルを敷いて、呼吸がしやすいようにした。それ以外は、車が来るまで藤木には為すすべがなかった。救急車が来るまで自分がどうしていたのか、藤木は今でも思い出すことが出来ない。

だが今になって言えるのは、あの日で妙子の存在が消えたとしたら、どんな喪失感が藤木を包んだらう。それに耐えることが出来たらうか。それを考える度に、藤木は妙子を生かしてくれた何かに、感謝せずにいられない。

救急車と一緒に乗って、三十キロ以上離れた市の総合病院に着いた。病院に着いてしまえばまた藤木に為すべきことはなかった。すぐに妙子が運ばれた三階の集中治療室の前の長椅子で待つしかなかった。はじめての知らない街の知らない病院。妻はどうなるのだから。ショックの後は心細さが藤木を包む。何かすることはしないのか。そうだ、由紀に連絡しなきゃ。ようやく頭が少しは回り出したようだ。

公衆電話を探した。携帯の普及で公衆電話は激減した。藤木は仕事を辞めると同時に携帯を持つのも止めた。もともと仕事以外に使うことなど殆んど無かったし、携帯が嫌いだ。一階の待合室まで降りないと公衆電話はなかった、財布から小銭と由紀の電話番号

を書いたメモを取り出した。由紀は藤木と妙子のたった一人の娘だ。十五年前に新潟の造り酒屋の息子に嫁いでいた。

十回以上も呼び出し音がなってから、由紀の義母が出た。藤木は少し迷ったが、ご無沙汰を詫びてから由紀を出してくれと言った。また長い間があった。一度だけ行ったことのある、大きな家が頭に浮かんだ。由紀が出た。久しぶりに聞く娘の声だった。藤木の電話を訝しんでいる。考えてみたら自分で電話をかけたのは、初めてだった。妙子が倒れたことを告げたら、黙りこんでしまった。やがて小さな音が聞こえてきた。嗚咽を必死でこらえているようだ。優しい子だった。妙子がそう育ててくれたのだろう。

唾を飲む音が聞こえて、すぐにてきばきと適切な指示を与えてくれた。知らないうちに大人になっていた。妙子の係累の人達には知らせたのかと言われた。今度は藤木が黙った。誰に連絡すればいいのかは、妙子に聞かなければ分からない。少し苛立った声で、とにかく明日病院へ行くから住所を教えろと言われた。これから調べると言ったら、分かったら直接私の携帯に掛けなさいと言われ、番号をメモして一旦電話を切った。

由紀に病院の住所を伝えてから、三階に戻った。いつの間にか日が暮れていた。長椅子に腰を下ろして由紀に言われた妙子の近親者のことを考えていた。妙子は神奈川の生まれだった。兄がいたが子供の頃に病死したと聞いた。それと確か東京にいる間に、妙子の両親の葬儀には出席した筈だ。八年前が父親で、五年前が母親だったと思う。

必死で記憶を手繰る。あとは妙子の両親の兄弟の近親者だけが、葬儀のときしか会った記憶はなかった。そんなに数は多くなかったように思う。この田舎に越してからは、誰も来ていない。年賀状程度のやりとりだったのではないか。そんなことにいかに無関心だったのが分かった。

いきなり集中治療室のドアが開いて、白衣にサンダルの方が出てきた。がっしりとした体格の男だった。まっすぐ藤木に近づいてくる。

「ご主人ですか」

野太い声で言って、まっすぐ藤木を見た。何の動揺もない。藤木にとっては生涯の一大事でも、この男にとっては日常の仕事の一部でしかないのだろう。

「いざれ詳しく申し上げますが、重度の脳出血です。命は取り留めると思いますが、身体的に重大な障害が生じると思われます。それは覚悟しておいて頂きたいのですが」

命は取り留める、その言葉が藤木の頭の中を駆け巡った。不覚にも涙が出そうになった。

妙子が死なない、妙子は死なない。取りあえずは妙子は居なくならない。その安堵で藤木は呆然と立っているだけだった。

「大丈夫ですか。今看護師が来ますから、入院の手続きをしてください。詳細については、明日お話をしましょう」

そう言って医師は階段を下りていった。

「藤木妙子さんのご主人ですか」

医師の背中をぼんやり見ている藤木の背後で、若い女性の声があった。

何かか鳴っている。聞いたことのある音だ。それが玄関のチャイムだと気づくまで大分時間がかかった。妙子は何をしているんだ。どうして応対しないんだ。妙子……そうだ妙子は倒れたんだ。病院で入院の手続きを終えたら、看護師に帰るように言われた。ずっと病

院に居たかったが集中治療室で完全介護だし、着替えとか入院に必要なものを取ってくるように言われたのだった。そう言われれば帰るしかなかった。由紀に連絡して、妙子の状態を伝えた。

病院から藤木の家の近くまで、日に何本しかない、路線バスが通っていた。その最終で帰って来た。看護師に言われたものを用意して、妙子の年賀状や手紙を調べて、それらしいのを幾つか取り分けておいた。食欲は無かったが無理をして軽い食事をした。横になっても眠れそうもなかったが、いつの間にかまどろんでいたようだ。枕元の時計を見たら夜中の三時だった。チャイムは鳴り続けている。こんな時間に誰だろう。

ドアを開けたら、由紀がいた。後ろに亭主が立っていた。

「どうしたんだ、こんな時間に」

「秀雄がとにかく早く行った方がいいって、電話の後すぐ新潟を発ったの」

「それは、それは」

藤木は秀雄に頭を下げて、二人を招き入れた。由紀は一度この家に来たことがあったが、秀雄は初めてだった。寡黙な男だという印象があった。由紀と秀雄をソファに座らせ、もう一つの椅子を台所から持って来て、向かい合った。

「お疲れだったでしょう。ご足労をかけます」

三人居ると、家の密度が上がって、少し元気が出た。由紀が立ち上がって、キッチンへお茶を入れたに行った。

「いえ、道が空いていたのでそれほどありません。この度は大変でしたでしょう。来よう、来ようと思いつながら仕事にかまけて果たせず、申し訳ありません」

由紀をもらいに挨拶に来て、カチカチに緊張していた若い頃の秀雄を思い出していた。妙子はひと目見ただけで、秀雄が気に入ったようだった。しばらく会わないうちに、その若者はすっかり大人になっていた。いい歳の取り方をしているようだ。由紀も幸せなのだろう。娘のことは心配は要らないようだ。

お茶を入れてくれた由紀が二階へ上がっていった。客間に布団を敷きに行ったようだった。一度しか来ていないのに、自分の家のようにだ。藤木と秀雄の当たり障りの無い会話が終わって、二人が黙りこくった頃、由紀が降りてきた。

「秀雄さん、もう休んだほうがいいわ。明日には帰らなきゃいけないでしょう」

秀雄は何年か前に、家業を継いでいた。それなりに大変なのだろう、仕事の都合をつけたらもう一度来ますと言って、二階へ上がっていった。由紀と二人だけになった。血とは思議なものだ。会話などなくても、お互いの妙子に対する想いが伝わって来る。二人の湯飲みが空になった。

「私たちも、寝ておいたほうがいい」

由紀が二階へ上がるのを見ながら、藤木も寝室へ戻った。

次の日は、秀雄の車で病院へ運んでもらった。秀雄はそのまま新潟へ帰っていった。指定された部屋で、由紀と二人で昨日の医師の来るのを待った。医師が入って来た。MRIの写真を何枚か発光スクリーンに貼って、説明を始めた。

「ここの血管が破れました。出血が脳室の方にまで及んでしまっています。そのため身体の動きを司る神経が機能しなくなりました。意識も混乱しています。判断するというこ

とが出来ない状態です。まあ、言葉は悪いですが植物人間に近い状態です」

由紀が下を向いてしまった。

「手術でどうこうとかいう状態ではないのですか」

「残念ながら手術の出来る場所ではないのです。薬で血液を溶かして、落ち着くのを待つしかない状態です」

「いつ母に会えますか」

「二日後には一般病棟に移れると思います」

藤木は最後に聞いた。

「今すぐ命にかかわるようなことは無いのですね」

「幸い……と喋っているのかどうか、生理機能はそれほど損傷されていないので、だいじょうぶでしょう」

「意識が戻ることはあるのでしょうか」

由紀が聞いた。

「突然戻った例があることはありません。しかし奇跡的なことでしょう」

医師と一緒に部屋を出た。妙子はICUの隣の処置室に移されていた。窓から様子が見えた。あらゆる所に管が刺さっていたが、静かに眠っているように見えた。由紀の瞳が濡れていた。病院を出た。もう昼近くになっていた。近くにファミレスがあったので、由紀と入った。二人ともコーヒーしか頼まなかった。

「お父さん、一人で大丈夫、もう二三日こっちにいいようか」

「大丈夫だよ、お前がいなくて秀雄君の会社も大変だろう。とにかく妙子は死ぬことは無いんだ。今はそれで良しとしようよ」

「何でお母さんがこんな目にあうの、お母さんが何をしたらっていうのよ」

急に由紀が駄々っ子のようになった。周りの客の何人かがこちらを見た。

「とにかく一度帰りなさい。一般病棟に移ったら連絡するから、きちんと日程を立ててお母さんに会いにくればいい」

「分かりました。そうします」

由紀の荷物を取りに、一旦家に戻った。何かあったら泊まりこむかもと、用意してきたようだ。駅までかなり距離があるので、隣町からタクシーを呼ぼうとしたら由紀が歩こうと言った。一時間に一本しかないローカル線の駅まで二人で歩いた。二人だけで歩くのはいつ以来だろう。あまりかまってやれなかったが、数えるほどの家族旅行を思い出していた。駅は川の向こうだ。橋の真ん中で、由紀が立ち止まった。

「本当にいい所ねえ。お母さんとても気にいって、お父さんを誉めていたわよ。内緒よっていつてたけど」

苦い思いがこみ上げる。妙子の好みなど考えてもいなかった。自分が気に入ったから決めただけだ。人は悲しい生き物だ。今ある状況が当たり前でいつまでも続くと思ってしまう。もう妙子の料理は食べられないのだろうか。

「お母さんは絶対この景色を覚えているわよ。そうよ、絶対思い出すわ」

由紀の列車を見送ったら、どっと疲れが出た。駅のベンチでしばらく座っていた。視線でレールを辿ると由紀の列車が山陰に消えていくところだった。妙子がいなければ、由紀

もいなかったのだ。妙子と知り合わなければ、由紀をこうして見送ることなど、できなかつたのだ。そのことがひどく不思議な気がした。妙子が倒れなければ、こんなことは考えもしなかつただろう。秋の陽だまりのベンチは心地良かった。列車が行ってしまったえば一時間には誰もいない。勿論無人駅だ。何処かで鳥が鳴いている。睡魔が襲ってくる。妙子が隣に居て、二人でこのまま深く眠って二度と目が覚めなかつたら、どれだけ幸せだろうと思つた。どのくらいそうしていたら。話し声がしてホームに人影が差した。藤木はゆつくりと立ち上がった。

三

山を秋の夕闇が一気に襲おうとしていた。微妙に陰影が変化する。妙子は居間の隅の医療用ベッドで寝息を立てていた。藤木はソファで煙草に火をつけた。もうすぐ妙子が倒れてから三度目の冬が来る。東京とは五度以上温度の違う厳しい冬だ。越してきた最初の冬は、ふたりで何度寒い、寒いと言ひ合つたらう。

食事の後は妙子の下の世話をした。人は悲しい生き物だ。生きていれば食べた以上排泄をする。食べて出して寝る。たつたこの八文字が今の妙子の全てだ。いや妙子だけではない。生き物全ての原則だ。違うのは妙子は独りではそれが出来ないということだ。誰かが付いていなければ妙子は死んでしまうのだ。

紙おむつの利便性を、藤木は使つてみてやつと実感できた。環境的に問題はあろうが、そんなことをいうなら車や、電化製品もおなじことだろう。人間は戻ることは難しい生き物だ。進むことしか出来ないのかも知れない。心ある人々はそれに抵抗しているが、藤木には、付けが回つてくることを覚悟することくらいしか出来ない。

妙子の排泄物をチェックして、新しいおむつに変える。医療用ベッドをソファの近くまで運んで、妙子をベッドに移し変える。ベッドにはキャスターが付いている。洗濯機を回してから掃除をして、二階へ上がって洗濯物を取り入れて、畳で箆笥に仕舞つた。これから夕食の支度をするまでが藤木の時間だ。煙を吐いてから読みかけの本を取り上げた。

ひと月近い入院の後、妙子は退院をした。入院している間に由紀や秀雄君が見舞いに来た。あの由紀が夜中に来た日に選んでくれた何人かに、手紙を出しておいた。妙子の姪や甥にあたる何人かから連絡があつた。その中の何人かが見舞いに来た。誰が話しかけても妙子の視線は何処をみているか分からなかつた。

首から下は殆んど動かなかつた。藤木は毎日病院へ通つた。もう仕事が無く時間だけが充分あるのが嬉しかつた。回復する見込みの無い者の見舞いはつらいのだろう。由紀と秀雄君以外の人は、一度だけの見舞いだった。由紀の落ち込みはかなりで、もう一度元気なお母さんを見たいと駄々をこねて、藤木を困らせた。藤木は病院へ通いながら、これから激変するであろう自分の覚悟を深めていった。

寝たきりの妻を介護するということは、どれ程の苦痛を藤木に与えるのだろうか。大変だろうということは、漠然と分かる。周りのベッドの病人が、口々に大変ですなえと言う。自分は大変でなく良かったという安堵が、表情に浮かぶ。その見舞い客までが、大変ですなえ、頑張ってくださいと言う。何を頑張ればいいのか。

越して来てから不思議な時間が二人の間に流れているのを、藤木は感じていた。初めて妙子に向き合った気がしていた。そしてうまく言えないが東京に居たときは、違う時間が二人に流れているのを感じていた。大きなヤマメを釣り上げて帰ると、妙子は自分のことのように喜んだ。その笑顔を見るのが嬉しくて、もっと大きなヤマメが釣りたくなかった。私も釣ると言って自分の竿まで用意した。藤木の山歩きにも時々同行してくれた。山の頂で旺盛な食欲で昼食を頬張る妙子を見るのも楽しかった。無理に藤木に合わせているとは思えなかった。

最初は見知らぬ土地で二人きりで暮らすことの心細さが、二人の距離を詰めたのかとも考えてみた。だがもしかしたら妙子は何かから、解放されたのではないのか、と考えるようになった。東京の生活が、何かしらの抑圧を妙子に与えていたのだろうか。山菜取りに嬉々として出かけていく妙子を見ると、自然児丸出しの今の妙子が本当の妙子ではないのか。だとしたら嬉しいことだが。倒れる前に聞いておくのだった。

もうひとつは会話が増えた。二人しかいないのだが当たり前だが、話題は全部自然のことだった。山が綺麗だ。星が素敵だ。川が優雅だ。魚が釣れた。きのこが採れた。原始人みたいな会話で終始していた。その単純さが二人の距離をつめたような気もする。その自然の中の終の棲家で、静かに人生を終えることを、お互いが受け入れられるようになってきたのではないのだろうか。そのことを時間をかけて、妙子と確認したかったのだ。それが出来る日が来るのだろうか。

退院の日に由紀と秀雄が来てくれた。秀雄君の車は後ろに車椅子ごと乗れるスペースがあった。家へ着いたら由紀が声を上げた。一階の居間には介護用のベッドとソファ以外は何も無かった。

「必要最小限以外のものは、全部二階へ上げた。二階は客間以外は使えない。介護認定が降りたら一階をバリアフリーにする。二階に何か欲しいものがあつたら、持っていっていいぞ」

妙子をベッドに移した。秀雄が手を貸そうとしたが、藤木は、いや、いいと断った。これからは何もかも一人でやらなくてはならない。早く慣れるのだ。妙子は目を大きく見開いていた。病院とは違う環境になったのが、分かるのだろうか。それを見た由紀が藤木を押し退けた。

「お母さん、分かるの、分かるのね。お母さんの家よ、ほら、山が見えるわ。お母さん、山を見て、お母さん……」

ベッドに突っ伏した由紀の肩が震えていた。藤木は秀雄とキッチンへ行った。

「由紀のことをよろしく頼む。表には出さないが、想像以上に参っているようだ」

「食欲が無く、随分痩せました。仕事は休んでいいと言うのに無理してこなしています。

私も親もどうしたらいいのかと……」

「時間の許す限り、一緒にいる時間を増やしてほしい。見守ってくれるだけでいい。そんなに弱い子じゃないはずだ」

「分かりました。そうします」

その日から新しい藤木と妙子の人生が始まった。役所からヘルパーの派遣を勧められたが藤木は固辞した。せっかく手にした二人きりの生活を失いたくなかった。自分の負担が

増せば増すほど、妙子に近づけた。何故男と女が一緒にいるのかも、分かりかけているような気がする。必ずそれを妙子に伝えて見せる。見ている、由紀、もう一度お母さんにお前の名を呼ばせてみせる。

家を空けるわけにはいかなかったので、料理は独学で本を読みながら実践した。誰かが人生は二度はないと言っていたが、藤木には二度目の人生が始まった。贅沢なことだ。脳医学の本を買い集めてゆっくり読み始めた。原書も取り寄せた。大学時代にかじったドイツ語をもう一度勉強し直すことにした。あんなにあった時間が、もっと欲しくなったのには笑った。料理が上達するのは嬉しかったし、複雑な脳の仕組みが徐々に理解できていくのは、新鮮な驚きがあった。

人は不思議な生き物だ。元気なときの妙子といるときより、今の妙子といるほうが、濃厚な時間が流れている気がする。人から見れば悲惨な状況だが、釣りや山歩きをしていた頃より、藤木は充実していた。奇跡的な回復をした人の体験談も、飽きるほど読んだ。大半が血のにじむようなりハビリで、身体的な能力を回復した例で、意識が回復した例は少なかった。

漢方薬が藤木の興味を惹いた。何でも試してみることだ。調べられるだけ調べて、薬を決めた。東洋医学の未知の力に賭けた。薬はかなりの高額で、蓄えが急激に減っていったが、気にもならなかった。いざとなればこの家を売って安アパートで暮らせばいいのだ。身体のマッサージも始めた。風呂に入れた後、身体を良く揉んで全身の関節を少しずつ動かすようにした。

あれはいつだったろう。妙子が家に戻ってきて少し経ったころだろうか。由紀が一人で家に来た。由紀が一番消耗していたころだ。必死で話しかけても妙子は反応しない。諦めて台所でお茶を飲んでいた藤木の前に座った。俯いたままぼつりと言った。

「お父さん、お母さんは生きています」

「どうしたんだ。お母さんが死んでいるとでも言うのか」

「……そうじゃないけど……あれが生きていけると言える状態なのかと、聞いているのよ」

「呼吸もしてるし、食欲はあるし、立派に生きていと思うよ」

「……あんなのお母さんじゃない……きつとお母さんだってあの時、いつそ死んだほうが良かったと思ってるわ」

乾いた音が台所に響いた。由紀の頬を張っていた。張った藤木がびっくりしていた。それほど無意識に手が出ていた。藤木は人を殴ったことなどなかった。由紀は頬を押さえてまた俯いた。少しの間沈黙が続いた。藤木が静かに口を開いた。

「軽々しく死んだ方がいいなんて、言うもんじゃない。あれがお母さんじゃなければ誰がお母さんなんだ。お前だって赤ん坊のときは、誰かに食事を与えてもらえなければ、死ぬしかなかったんだぞ。それより何より、あの人がいなければお前もここにいないんだ。どんな状態だろうがあの人俺の妻で、おまえのお母さんだ」

由紀の嗚咽が聞こえてきた。

「お前の気持ちも分かっているつもりだ。あんな母さんを見るのがどんなに辛いのかも分かる。だが、だからといってその対象が無くなればいいと言うのは、お前のエゴだ……由紀、変なことを言うけど、お父さんは今のお母さんが一番好きなんだ。信じないだろうけど、今の状態が全然苦痛じゃないんだ。お母さんの面倒をみていると、自分がどんなにお

母さんに面倒をみられていたかが、よく分かるんだ。それが分かる度にどんどんお母さんが好きになるんだ。うまく言えないけど、感謝とかいうのとも違うんだ」

言いながら、少し照れた。

「俺の言いたいのはベッドにいるあの人は俺の一番大切でかけがえのない人だということだ。そしてお前にもそう思っただけでほしい、今は無理でもお前ならいつか必ず、そう思える日が来るとお父さんは思っている」

俯いたままの由紀の肩を抱いて、二階の寝室へ連れていった。

四

あつという間に灯りを点けなければ、本を読めない暗さになった。さすがはつるべ落としの秋の陽だ。本を閉じて照明をつけて、窓のブラインドを下ろした。今日の夕食は久しぶりのパスタだ。藤木の苦手の部門の一つだ。今夜こそ克服して妙子の身体を今迄で一番揺らせてみせる。スパゲッティ、ボンゴレだ。いいアサリが冷蔵庫に入っている。

フライパンを火にかけてオリーブオイルを注ぐ。すぐつぶした大蒜を入れる。焦げる前に大蒜を取り出さないと苦味がでてしまう。調味料を揃えようとして、オレガノが切れているのに気づいた。しまった、買うのを忘れていた。ブラックペッパーで代用するか。でも口惜しい。そのとき古い調味料を整理して、二階に仕舞ったのを思い出した。燃えないゴミの日でなかったので、取りあえず二階に上げておいたのだ。

確かその中に、古いが封を切っていないオレガノの瓶があったはずだ。探してみよう。ガスの火を止めて二階へ上がった。上がったのはいいが、どこに仕舞ったのかを思い出せない。意地になって、片っ端から探しまくった。

客間じゃない部屋を探して、次の納戸の棚を調べようとしたとき、段ボールの箱が落ちて中身が散らばった。あの日整理した、妙子の手紙や年賀状の箱だった。舌打ちをして屈んで中身を戻そうとした。散らばった手紙を拾い集めていると、なにも書いていない白い封筒が目に入った。全部調べたと思ったが、記憶になかった。動転していたから封筒だけだと思っただろうか。拾い上げると、結構分厚い感触があった。簡単にセロテープで封を止めてあるだけだった。開けてみると、かなりの枚数の便箋が入っていた。客間に入って電気を点けて、立ったまま読んだ。

藤木俊介様へ

この手紙を貴方が読んでいるということは、私に何かあったということね。のんびり屋の貴方はもちろん気がついていないでしょうけど、今までに何度か貴方に手紙を書いているのよ。数ヶ月か、一年くらい後に破り捨てているから、この手紙の前の手紙は無いわ。この手紙も私が破り捨てることが出来ればいいけど、少し不安があるの。

一昨日、貴方が釣りに行っているときに、ひどい頭痛がして少し吐いたの。今までで一番痛かったわ。大丈夫、今日は土曜日だからしょうがないけど、月曜日には市の総合病院まで行って、きちんと調べてもらうから。

さて、俊ちゃん。のんびり屋の貴方をびっくりさせてあげましょう。私は貴方が退職し

たら別れるつもりでいました。はやりの熟年離婚の波に乗り遅れては大変ですから。あーあ、離婚という言葉は書くだけでもすっきりするわ。言葉にしたらどんなに気持ちがいいかしら。でも離婚という文字を書くのは、貴方と由紀の子育てで大喧嘩したとき以来だわ。あの手紙も破るときには笑っていられた。破るときに読み直すと、そのときの自分の感情が蘇って、今の自分が再確認できるのよ。破る手紙は、自分に書いているのかもしれないわ。

でも、俊ちゃん。賢みなあなたなら、つもりでいました、と過去形になっているのに気づいたことでしょう。ジャーン、おめでどう。正解です。……ということは、そうです。貴方は別れなくてすんだのです。いやあ、良かった良かった。

でもちよっとは悩んだの。おかげで皺が七本は増えたわ。誰にでも人生を振り返るときが来るわ。そのとき自分には本当にこの人生しかなかったのかと考えるのよ。そして夫や子供の呪縛から解放されて、自分らしい人生を模索しようとする。そして勇気のある人は、新しい人生に踏み出すわ。もちろん単純に、疲れて一人になりたいから別れるという人もいると思う。そういうことが熟年離婚かと私は思うの。私はちよっと違うけど。

私は貴方が東京を離れるなんて、思ってもいなかったわ。あんなに仕事にのめり込んでいたし、すごく都会的「ちよっと誉めすぎ」な人だったから。でもだったらどうして、もっと早く言ってくれなかったの。貴方があと五年働くと言ったとき、本当に別れようと思ったわ。もう充分働いたし、そこそこの地位までいったじゃない。何故なのと腹が立ったの。

またびつくりさせるけど、私は幼い頃、対人恐怖症だったの。私は覚えてないけど、兄の死に、何か関係しているらしいわ。両親が話しているのを、盗み聞きしたことがあったの。両親は大変な思いをして、直したと言っていたけど、完全に直っていないのは私が一番知っているわ。覚えてる？ 貴方がたまに部下を家に連れて来たとき、いつも私は食事やお酒は出すけど、決して同席しなかったでしょう。

そのことで貴方に随分叱られたけど、それどころではなかったわ。脂汗が出ていたの。私は恥ずかしいからで通し、貴方は、家内は人見知りが激しくてねえと言いつけてくれたわね。本当に貴方が滅多に部下や友人を連れて来なくて助かったわ。近所づきあいの悪さでも随分叱られたわね。でも両親が結婚のときに、貴方にそれを言わなかったから、私も隠し通そうと決心したの。直るかも知れないという期待もあったわ。

由紀が大人になったとき、打ちあげたの。貴方に話すべきかとも言ったわ。由紀は、平気よ、私だって全然気づかなかったわ、と言ってくれたの。別れようと思ったときも由紀に相談したの。貴方が仕事で疲れきったように、私もその病気で、人と会うときは絶えず大なり小なり緊張し続けて、その疲れが限界に来ていたわ。それでも貴方が仕事を辞めれば、少しは楽になれるかと思っていたの。貴方に甘えて一人でのんびり旅行でもする時間を作ろうと思っていたのよ。その矢先にあと五年働くときたでしょう。キレたわよ。皿を三枚割ったわ。

由紀は、分かったわ、私も同席するから一度三人でじっくり話しましょうと言ってくれたの。そしたら新潟から帰った次の日、貴方から話がある、と言われた。びつくりしたわよ。由紀がチクったんじゃないかと思っちゃったわ。貴方は言いにくそうに、もじもじしてたでしょう。焦ったわよ。貴方のほうから別れ話が出るのかと思っちゃった。そしたら

この土地で静かに二人で老後を過ごさないかでしょう。ヤッターよ。万歳よ。でも面白いから、眉をひそめて本当に困った顔をしたわ。貴方は慌てて、いや別にここに決めたわけじゃないから、もっと都会に近いところを探してもいいし、とか言いながら逃げていったわね。由紀に電話して、一人で笑ったわ。不思議ね。こんなに長い年月を一緒に暮らして、私たちはお互いのことをちつとも分かっていなかったなんて。

有難う、貴方。あの後私が見たいと言って、二人でこの土地の下見をしたわね。とても気に入って、もう五年頑張れる気力が湧いたわ。ここで暮らすことで、何か、どんな本当の自分に戻っていくように感じるの。誰とも会わずにすんで、大好きな自然に囲まれて、四季の移ろいを満喫できる。本当の暑さや、寒さや、風を肌で感じる事が出来る。贅沢なことだと思っわ。

この自然と、貴方とゴンがいれば、私にはもう何もいらぬ。違った。釣りが上手くなって、もっと大きなヤマメを釣ってね。私も来年はもつと沢山の山菜を取るわ。

この手紙を貴方が読んでいて、私がそれを知らないということは、私はもう死んでいるのかしら。だったらこの手紙は私が書く最後の手紙で、遺言状になるわけね。それならきちんと言っわ。人生に意味なんてつけるのは、おかしいと思うの。百の人がいたら百の人生があるの。生まれてすぐ死んだ赤ん坊の人生も、ノーベル賞を取って長生きした、りっぱな人の人生も、同じだと私は思っているの。変かしら。かけがえの無いということではおなじことよ。

私がかげがえのない貴方に会えたわ。そしてこんなに楽しい生活ができて。何度でもありがとうを言うわ。悲しまないでね、貴方。貴方が悲しんだら、私が辛いと思ってね。

最後にわがままを言ったい。骨のかけらを、どこか山で見えるところに埋めてほしいの。山を眺めながら、ここの土になっていきたいの。しつこいようだけど、もう一度言うわ、ありがとう、貴方。

便箋に小さな水滴が落ちた。水滴が溜まって、大きくなって便箋の折り目を伝わって床に落ちた。静寂のなかで水滴の落ちる音が、はっきりと聞こえた。便箋を丁寧に畳んで封筒に戻した。俺もこの封筒と一緒にこの土地の土になるのだ。人は嬉しい生き物だ。予想もしていない贈り物を受け取ることもある。すぐに妙子の傍に行きたかったが、我慢してオレガノを探した。見つけた。賞味期限は切れているが、ひと月しか経っていない。十分使える。封筒とオレガノを持って階段を下りた。

オレガノの瓶をキッチンに置いて、椅子と封筒を持って妙子のベッドの脇に座った。妙子は山の方に身体を向けていた。顔を覗き込んだら、目を閉じていた。寝息は聞こえなかったが、寝ているのだろうか。顔の前に封筒を置いたが、目は閉じたままだった。椅子に座った。しばらく静かに上下する掛け布団をぼんやり見ている。

「やっと手紙を読んだよ。何で早く言わなかったんだよ、俺が対人恐怖症なんか気にするわけじゃないじゃないか、気づけよってか。俺たちの世代は仕事バカばかりだから、家庭は休息の場所くらいにしか、思えないんだよ」

掛け布団の上下が止まった。ううつと声を出した。夕飯の催促の声だ。漢方薬とマッサージの効果だ。妙子が何を欲しているのかが分かる。もう会話してると同じだ。

「分かった、分かった。ご飯を食べながら話そう」

これで材料は全て揃った。ガスの火をつけて眺めていたが、また消した。こんなことをしているより、やっぱり妙子に言いたいことを、言ってしまったかった。

またベッドの脇の椅子に座った。掛け布団の上下は不規則だった。起きているのだ。身体が向こう向きで丁度良かった。面と向かつては照れてしまう。

「ご飯が少し遅れるけど、我慢してくれないか。お前の手紙を読んで、俺もどうしても言っておきたいことがあるんだ」

また、掛け布団が止まった。

「いろいろあるんだけど、とにかく手紙をありがとう。お前が手紙を自分で破ることが出来て、俺は相変わらず何も知らない。それが一番良かったんだろが、俺は手紙が読めて良かったんだ。俺はお前を無理やり自分の都合で田舎に閉じ込めたんじゃないのかと、ずーっと気にしていたんだよ。そうじゃないのが分かってやっと安心したよ」

掛け布団がゆっくり上下する。夕食の催促の声を出さない。

「あとはお詫びだ。俺がお前がかけがえの無い人だと気づいたのは、いやうすうす思っていたとは思うんだけど、お前が倒れてからやっとはつきり分かったんだ。すまん」

掛け布団の上下が不規則になった。

「あと、これが一番言いたかったことなんだけど、妙子、お前は死んでいないんだよ。お前はどんな人の人生もかけがえのないものだとして書いていた。俺もそう思う。だから今もお前はかけがえの無い人生を歩いているんだ。そして俺に沢山のものを与えてくれている。俺がどれだけお前を必要としているか分かるか、妙子」

知らずに声が大きくなっていた。

「聞こえるか、妙子。いや聞こえなくてもいい。お前は生きているんだぞ。俺と一緒に生きているんだ。お前が俺に何回ありがとうと言ったって、俺は必ずそれより一回多くありがとうって言ってやる」

最後は大声になってしまった。掛け布団が変な揺れ方をしている。大きな声がいけなかったのだろうか。慌てて顔を覗き込んだ。目を開けていて別に変った様子はない。封筒が顔の下になっていた。取り出して夕食を作り、キッチンに行こうとした。手紙に違和感があった。鳥肌がたった。手紙をそうと触る。封筒は濡れていた。なんども触る。間違いない濡れている。

ベッドに戻ってスタンドのライトを点けて、妙子の顔を見た。目の下をそうと手の甲で触れた。ライトに手をかざすと手の甲は確かに濡れていた。藤木は手の甲を不思議な生き物を見るように眺めていた。それからもう一度妙子を見て、笑いながら言った。

「そうか、また俺をからかう気か。妙子」

偶然の身体の変調で涙が出ただけなのかも知れない。それとも本当の涙だろうか。どっちだって構うものか。今夜こそ完璧なスパゲッティ、ボンゴレを作って見せる。